

介護を受けるということ③

前々回から始まったのは、判断力は十分ですが身体状況が悪い夫と、認知症の妻という、80歳代夫婦のお話です。遠方に住む子供たちが両親の介護保険の認定申請を手配しようとしたのですが、断固拒否されてしまいました。

当初、このご夫婦の生活で問題になっていたのは、それまで家事を一手に担っていた妻の認知症が進行したことにより、自宅内の清潔が保てなくなったことです。冷蔵庫の中の食品はすべて賞味期限切れ、食器や調理器具もきちんと洗えておらず、台所のスペースに入ったとたん異臭がするほど。しかし子供たちが台所に入ろうとすると、妻は「私がやるからいい」といって、台所に自分以外が入ることすら拒否してしまうのです。



そこで、最初にこのご夫婦に介護保険の申請を勧めるときに、「ヘルパーさんが掃除してくれるから」「このままではゴミ屋敷になってしまうかも」「衛生的に危険だから」と、子供たちがご夫婦を説得したところ、逆上してしまったとのこと。

確かに、子供たちは心配して介護保険の利用を勧めているのですが、両親にとっては、「家事ができていない」という烙印を押されてた気持ちになったのでしょうか。以前は家事にプライドをもっていた妻にとっても、そんな妻の気持ちを慮る夫にとっても、受け入れられない提案だったようです。

子供たちから連絡を受けた地域包括支援センターの職員が自宅を訪ねて行っても、インターホン越しに「結構です」と、取り付く島もないような状況だったそうです。

膠着状態が続き、子供たちとご夫婦との関係も心配されましたが、そうしたタイミングで夫が一時入院することとなりました。入院中に、自宅に残している認知症の妻の心配ばかりしている父親を見て、子供たちが改めて父親に提案しました。

「お父さんは、これからもできる限り入院や施設入所をせずに、家でお母さんと生活したいんでしょ？だったら、少しでも長くその状態をつづけるためには、介護保険で訪問介護や訪問看護のお世話にならないと無理だよ。私たちにも仕事や生活があるから、申し訳ないけど24時間お世話をするにはできないし、介護や看護はプロに依頼すべき。」

そして妻に対しては、「お父さんがひとりで介護保険を使うというと嫌がるから、お父さんのために、お母さんも一緒に介護保険を始めておいてくれないかな？お母さんが一緒ならお父さんも抵抗なく訪問看護を入れてくれるから」とお願いしたところ、夫の助けになるのならと問題なく受け入れてくれたそうです。

元気なうちは「必要になったら介護保険を使えばいい」と頭では理解していても、実際にその状況になったときは、そうすんなりとは行かないものです。

介護保険の申請を促す周囲の関係者の声掛けにも、ご本人の尊厳を大切にすると工夫が必要になってきます。